

P22 小児の口唇閉鎖力の発達に関する研究

The study of the Development of Labial-Closure-Strength in children

○ 深水 篤¹⁾、齊藤一誠¹⁾、奥 猛志²⁾、稲田絵美¹⁾、武元嘉彦¹⁾、山田千晶¹⁾、早崎治明¹⁾、
山崎要一¹⁾

Atsushi Fukami, Issei Saitoh, Takeshi Oku*, Emi Inada, Yoshihiko Takemoto, Chiaki Yamada, Haruaki
Hayasaki, Youichi Yamasaki

鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野¹⁾

おく小児矯正歯科（鹿児島県鹿児島市）²⁾

Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Science, Department of Pediatric Dentistry¹⁾

Oku Pediatric and Orthodontic Dental Clinic(Kagoshima City)²⁾

【目的】 口唇は、摂食、咀嚼、嚥下、会話、表情などに関与する口腔の重要な器官である。近年、口唇を閉じる力（口唇閉鎖力）と咬合に密接な関係があると指摘されているが、客観的な評価の基準は確立されていない。そこで、今回我々は就学前小児の口唇閉鎖力について調査をおこなったので報告する。

【方法】 対象は鹿児島市の某幼稚園に通園する小児、および本学歯学部¹⁾の学生である。小児は 3 歳男児 24 名、3 歳女児 20 名、4 歳男児 48 名、4 歳女児 24 名、5 歳男児 35 名、5 歳女児 34 名であり、成人は男性 44 名、女性 38 名とした。

デンタルフロスを結んだボタン（直径：24mm、厚さ：4mm）を切歯唇面と口唇の間の口腔前庭部に挿入し、口唇で保持させた。口腔外のデジタルフォースゲージ（イマダ社）にフロスをつないだ状態で、ゲージを床と平行に外側に引き、ボタンが口腔外にはずれたときの値を口唇閉鎖力とした。

【結果および考察】 就学前小児の口唇閉鎖力は増齡的に大きくなっていったが、いずれの年齢においても性差は認められなかった。成人は小児の 2 倍近い口唇閉鎖力を示すとともに、統計的に有意な性差も認められた。小児では 3 回の計測における個人内変動が成人より大きい傾向が認められ、繰り返し測定が必要であることが示唆された。

なお、本研究は鹿児島大学疫学研究倫理委員会にて承認を受け、その計画に従って実施された。